

Title	他者表象における自己規定と暴力の所在 : Around the World with General Grantにおける天皇表象から
Author(s)	ガラシーノ, ファクンド
Citation	文化/批評. 2013, 5, p. 88-106
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75714
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

他者表象における自己規定と暴力の所在

—Around the World with General Grant における天皇表象から—

ファクンド・ガラシーノ

はじめに・本稿のテーマをめぐって

1879（明治12）年6月21日、世界一周旅行の途中にいたアメリカ合衆国の前大統領、ユリシーズ・シンプソン・グラント（Ulysses Simpson Grant 1822-1885）が長崎に上陸した。1877年にアメリカを離れて、欧州各国、エジプトやパレスチナ、インド、タイや中国などを遍歴したグラントにとって、日本は9月3日に横浜から帰国の途次につくまで最後の目的地となった。さて世界旅行の間、ジョン・ラッセル・ヤング（John Russell Young 1840-1899）という名前のアメリカ人ジャーナリストも同行し、グラントの随行書記を務めることになった。ヤングは行き先でのグラントの言行や諸氏との交流の様子、船旅の合間にグラントが語った南北戦争の回想などの記録に交ぜて、自身の各地での見聞を書きとめて、*Around the World With General Grant*（以下、「旅行記」と表す）と題する著書にまとめられ、多くの読者を獲得し広く読まれたという。

筆者は別稿において、グラント一行による日本訪問を契機に展開された多様な主体からの錯綜する眼差しに注目し、そこから近代成立期の日本における自他認識のあり様と問題を論じてみたが、そのなかでヤングの旅行記をも取り上げて、彼のアジアや日本に対する認識と記述のスタイルに関して若干の考察を行った¹⁾。そこで、本稿では、旅行記に数多く描かれているグラントと明治天皇との交流の場面や天皇表象に関わる記述に注目したい。旅行記においてヤングは「日本の伝統、宗教や政治構造」のなかで天皇が占める地位や意義を紹介し、神秘的で聖なる他者「Mikado」をアメリカの読者に提供している。それと同時に、このように描かれた神聖なる存在が急速に西洋化していく新興国家の君主として前大統領をもてなす意義を、「帝国主義的なヨーロッパ諸国」との差異化という伏線のなかで、繰り返し問いかけている。これを受けて本稿では、天皇の表象を軸に自己規定という観点から、他者を表象するという主体の営みを取り上げていく。

1. 文化人類学による『オリエンタリズム』批判と本稿の課題

上記のように、前章では本稿で論じるテーマを簡単に紹介した。これを受けて本章では、

本稿の論じる問題と関わる（他者）表象研究やオリエンタリズム批判に対する筆者の問題意識を明らかにしながら、本稿が取り組まなければならない課題を提起する。太田好信は『トランスポジションの思想』のなかで J. クリフォードなどの文化人類学者による E. サイドの『オリエンタリズム』に対する批判を踏まえつつ、オリエンタリズムを言語と現実の関係を問う「認識論的な批判」として規定することを「誤り」と位置付けている。なぜなら、オリエンタリズム批判の主眼はオリエンタリストの他者についての語りを可能にしている不均衡な社会状況・植民地的状況を批判する点にあり、認識論的な問い立ては発話の状況を脱コンテキスト化・非歴史化しかねないためである [太田 2010 : 102]。

オリエンタリズム批判の主眼は発話をめぐる権力の不均衡への批判にあるという問題意識は筆者も共有している。しかし他方では、「言語・現実」の関係を認識論的に考察することを「誤り」と裁断した議論は、表象テキストの内在的分析をおろそかにしがちではなかっただろうか。実際、サイドはオリエンタリズム的表象をフーコーの言う「言説」(discourse)として捉える際には、主体が対象を支配・再編成し、ついには対象を新たに産出＝「現実」たらしめるテキストとしてこれを問題化しているはずであり、これを批判するためには政治的・社会的状況と同時に、テキストの内部における叙述のスタイルや比喩、舞台設定や物語装置にも注目すべきと指摘しているのである [Said 2003 : 21]。

クリフォードや太田はサイドが上記のフーコーの立場を二転三転していると批判する [太田 2010 : 103]。しかし本稿では、オリエンタリズムを言説として捉える問題意識に立ち、テキスト内在的な分析を試みる課題に取り組みたい。そうすることで、テキストにおける具体的な装置や展開に焦点を合わせて、天皇表象がコンテキスト化・制度化されていく過程におけるヤングの旅行記の位置づけを考えると同時に、表象研究におけるテキスト内在的分析の可能性を再考することを試みる。その際、オリエンタリズム的言説の中核にある表象主体・対象との不均衡な関係を「暴力」として読み直した上で、天皇をめぐる記述を中心としたヤングのテキスト内部における暴力の所在と行方を探り、表象主体が自己規定を実践する上で暴力の記述は如何に操作されたかを検討する作業を展開していく。

2. 旅行記とその著者について

前章では、他者表象のテキストを改めて「言説」として捉えなおした上で、テキスト内在的な分析を通して、自己規定を展開していくヤングの天皇表象における暴力の所在と記述スタイルを検討していく、という具合に本稿の課題を設定した。次に本章において、まずは第1節でヤングという人物について述べた後、第2節では考察の対象となるテキスト

の基本的な性格や問題を確認して、最後に第3節ではグラントの世界旅行の背景や日本訪問での主な出来事などについて見ていく。

2-1. ジョン・ラッセル・ヤングについて

ジョン・ラッセル・ヤング (John Russell Young 1840 - 1899年) は、『ニューヨーク・ヘラルド』(New York Herald) という、アメリカ合衆国ニューヨークに本部を持ち、19世紀後半にかけて膨大な発行部数を誇った新聞の編集員や海外特派員を務めたジャーナリストとして知られている。ヤングは1872年以来、パリやロンドンで同紙の派遣員として勤務することになるが、1877年にイギリスで世界一周途次のグラントに会って、同行を依頼されたのをきっかけにその一行に加わることとなった。ヤングによれば、記録を取るという構想は旅に同行するように誘われた当初から存在していたわけではなかったようだが、やがて彼がグラントの言動や諸人物との交流の仔細を定期的に同紙に報告するようになると、それらが記事となり大いに衆目の帰るところになったという。このように、すでに発表していた記事に加えて、自身の日記類や旅行中に交わしたグラントとの会話の記録などに基づいて、ヤングは帰国して間もなく、1879年中に *Around the World with General Grant* (全2巻) の第1巻をまとめることにいった。

世界をともに旅したヤングとグラントの間に深い友情が生まれ、2人はやがて強い信頼関係で結ばれるようになったと言われている。そのため、ヤングの力量を高く評価していたグラントが後年チェスター・アラン・アース大統領 (Chester Alan Arthur 1881 - 85在職) に対してヤングを駐清公使として推薦した。実際、ヤングは1879年、日本を訪れる前に清朝中国を長く旅しており、これを契機に李鴻章と知り合い、やがてこの実力者と友好関係を築きその信頼を獲得するのにいった。これが見込まれたお陰で、ヤングは1882年から85にかけて駐清公使を勤める。その後は『ニューヨーク・ヘラルド』に復帰して、海外特派員としてロンドンで長く勤務した。最後には、ウィリアム・マッキンレー大統領から任命されて、1897年に国会図書館の司書にまでなっている。そして1899年1月、ワシントンで静かに他界した。

2-2. *Around the World with General Grant* の性格と問題

上記のように、前節ではヤングという人物について紹介した。これを受けて本節では、彼の著した旅行記を取り上げ、後の考察を助けるべくその執筆背景を確認し、テキストの基本的な性格や問題を概観しておきたい。

ヤングは焦点を常にグラントに集中させ、元大統領の旅路の仔細や各地での言行と諸

人物との交流の様子を念入りに書いていくと同時に、始終ヤング自身として1人称で語り通し、各地での個人的な見聞や感想、想いなどをその合間に記している。その他、長い船旅のなかでグラントと交わされた会話の記録も公開されている。そこでグラントが語った南北戦争の著名な戦闘とそこで戦った将軍たちの思い出や、大統領在職期の出来事に関する意見が読者の関心を惹いたであろう。現に、ヤングの著書が刊行される前には新聞記事を下敷きにした安価な海賊版の旅行記が既に数種出回っており、前大統領の旅行は当時のアメリカで広く注目されていたことが窺える。旅行記の第1巻がグラント一行の帰国後間もなく刊行されたことにこういった事情も影響したとも考えられ、ヤングをしてアメリカの広汎な読者の眼差しを意識せしめたのであろう。

さて、アジアを訪れて以来、ヤングがオリエントに関心を抱くようになったが、旅行の時点ではアジア諸国に関して深い見識と理解を持っていた訳ではない。むしろ、後述していくように、当時の欧米で一般的に流布していた書物に現れた言説を常に参照しながら、オリエントで自身の差異の経験を記述していったと見た方が妥当であろう。

2-3・グラントによる世界旅行の背景とその道程

1869年から1877年に及んだグラント政権は絶え間ない汚職や不祥事に見舞われ、さらに1873年に世界規模の恐慌が襲いかかる。満期後、グラントは政界から一時的に離れるが、恐らく公的な立場での更なる活躍を視野に入れつつ、非難から逃れると同時に、かつ政治的に無難なかたちでなお一定の注目を集める立場を確保する手段として、海外渡航が構想されたと考えられる。したがって、世界旅行はグラント一個人としての私事ということになる。しかし、当時のグラントの名声はあまりにも大きく、公的な性格を帯びることとなった。このようにアメリカ海軍が一行の移動に船舶を提供して、一行が各国政府に迎えられることになった。そのお蔭でグラントはヴィクトリア女王やビスマルク、ラーマ5世や李鴻章とも面会して、優遇されながら各国を遍歴することができたのである。

日本でも、こういった状況に注目し、ドイツやイタリア皇族の来日という前例に準じて、グラントを国賓として、すなわち国家の正式な客として待遇することになった。当然のごとく、ここには比較的良好な関係にあったアメリカ政府へのアピールという企図が含まれていた。グラント一行は1879年6月21日長崎に上陸して、ここで数日滞在した後、瀬戸内海を航海し駿河湾に寄港した後、7月2日横浜に上陸する。横浜で盛大に歓迎された前大統領はさらに特別仕立て列車で東京に向かい、宿舎として指定されていた浜離宮の迎賓館・延遊館に入る。そして9月3日に蒸気船「シティ・オフ・トウキョウ」で帰国の途につくまでの間、グラント一行は東京と横浜を数回行き来し、さらには日光や箱根、豆州三

島などにも旅している。

それに加えて、グラントは数回にわたって明治天皇に謁見したほか、政府の最上層部や華族、民間の著名な人物、各国の外交官や在日外国人とも交流した。外務省が一行の「接待掛」として吉田清成や、旧宇和島藩主・伊達宗城などを任命した。その他に、東京府会会長・福地源一郎と商会会議所頭取・渋沢栄一を筆頭として、商工業界を指導する実業家や区長層などの有力市民を構成員として、東京府民代表の接待委員も形成された。規模の差こそあれ、グラントが訪れる各地で同様の動きが起こっている。

なお、グラント一行が訪れた1879年夏の日本は、同年3月に断行したいわゆる琉球処分やこれを期に深刻化しつつあった琉球所属問題をめぐる清朝中国との対立が原因で、国際的に極めて緊張した状況にあったことは無視できない。清国を訪れた際、李鴻章や恭親王など最高の実力者と面会したのをきっかけに、グラントが日本政府側との調停を依頼されたのである。日清間の交渉が行き詰ったなかで、日清両方とも友好関係にあった国家の前元首が訪問したことに危機打破の期待が集ったのであろう。これに応じて、1879年7月22日、グラントが内務卿・伊藤博文や参議・西郷従道と琉球帰属問題について会談し、さらには8月10日、浜離宮で天皇と面会し、武力衝突を避けて清国側の要求に一部答えながら外交路線で平和的な解決を図るべきとの意見を述べた。

3. *Around the World with General Grant* における天皇表象の展開

以上のように、前章では、ヤングという人物やその旅行記、およびグラントの世界旅行や日本訪問に関わる基本的な事柄を確認した。これを受けて、本章では旅行記の具体的な検討に入る。以下では日本訪問の記録がまとめられている旅行記の第2巻に目を向け、天皇が登場、もしくは言及される箇所をまず第1節で整理し、天皇を表象する際にヤングが記述をどのように展開させたかを第2節で検討する。

3-1. 天皇が登場する場面

日本に関する記述は、長崎での滞在を語る第2巻の第40章からすでに行われているが、天皇が登場するのは第42章からである。折しも7月4日、即ちアメリカの独立記念日であり、この日にグラント一行が東京の赤坂仮皇居に赴いて明治天皇に謁見して、初めて挨拶を交わすといった場面である。次節で行う考察に向けて、これを第1番の場面と呼ぼう。そこでヤングは世界旅行の途中ですでに訪れたヨーロッパとアジアの宮殿を思い起こして、これらと仮皇居を比較し赤坂のそれは神聖視される君主の宮殿とは思えないほどの簡素さであるとの感想を表すとともに、初めて目にする明治天皇の様子を描写している。ヤ

ングの目には明治天皇が細長い身体を持ち、ハプスブルク家の特徴的な口元を連想させるような唇をしているように見えた。

さらに、謁見の間は明治天皇が彫刻と勘違いしてしまいそうなほどに無表情な顔を見せ、その身振りも不器用であり始終緊張していたとヤングはいう。そこで、ヤングはヨーロッパの諸王室の仕来りと日本皇室のそれとを比較し、前者は莊重でありながらも真心がこもっているのに対して、後者は至って嚴肅であるという印象を持つ。もっとも、彼によればこのような独特の雰囲気は、日本の君主が政治や宗教の領域で伝統的に保持してきた特異な地位に照らして当然のことであるという。かつて外国の元首であった名士と対等に接して、握手まで交わした当日の謁見の場はむしろ日本にとって画期的な出来事であったとむしろ捉えるべきであるとヤングは判断している。

第2番の場面として、同じ42章、グラントと天皇とが同じ馬車に乗り、日比谷練兵場で行われた陸軍飾隊式に臨む箇所が挙げられる。後に再びこの場面に注目し詳述することになるため、ここでは深入りはしないことにする。その他42章では、グラントが8月10日に浜離宮で明治天皇と談話し、議会政治や外債、条約改正、租税や琉球所属問題などに関してその意見を述べる、いわば第3番の場面がある。日本の特異な君主が内外の重要事項に関する外国人の意見を自ら求めたことにヤングが感銘を受けたらしく、この浜離宮会談の様子と1869(明治2)年に新しく駐日アメリカ公使となったデ・ロング(Charles E. De Long)を高御座から見下ろした天皇とを比較して、日本がそれ以来遂げた「進歩」の程に驚嘆している。

天皇が登場する第4番の場面とは、第43章中の、8月25日に上野公園で行われた東京府民代表主催の祝典の様子を伝えた箇所である。その際、東京府民の代表が「皇居に咫尺し奉る」ことの「天恩」に応えるという面目を立てて、天皇を主賓として迎えた上野公園の祝典にグラント夫婦を招待するといった形式が取られた。上野公園の祝典では撃剣や槍術、流鏑馬、犬追物などの演武が行われ、花火も打ち上げられるなどして、見物人や客を楽しませる工夫が様々と図られたことが窺える。そしてヤングがこの祝典を日本訪問の頂点と位置づけているほど、これがグラント一行に深い印象を残したのである。彼は8月25日の出来事をグラントとアメリカ政府への日本政府からの最大の好意の表現として受け止め、それを率いる天皇の得意な地位や伝統に鑑みて、グラントへの厚遇が如何に重大な政治的な意義を持ったかを主張している。

そして天皇が登場する第5番の場面は、第44章に描かれる、8月30日にグラントが明治天皇に暇乞いの挨拶をするくだりである。ヤングはここでそれまでの2人の交流を振り返り、この時の天皇とグラントとはもはや友人同士の間柄であったと記している。

3-2. 各場面での記述の展開

前節ではヤングの旅行記に天皇が登場する場面を整理して、その内容を簡単に紹介した。これを受けて本節では、上記5つの場面における記述の展開の方に注目したい。その際、ヤングが天皇を表象する際に用いるモチーフや戦略を整理するべく、対象場面の内容をあえて図式化し類型に分けてみた。まずはヤングが天皇を対象化する時にどのような事柄に注目し、どのような言葉や表現を用いて、また天皇とどのようなものを関連させているかをまず確認するところから表象内容の考察を始めなければならないだろう。さて、以下では上記5つの場面にわたって筆者が類型に分けた項目をまず整理して、その次に場面の展開を図式的に確認する。

旅行記における天皇をめぐる記述の類型

- A) グラントと天皇とが会する場の描写
- B) グラント一行の様子、服装などの描写
- C) 天皇の様子、身体的特徴や服装などの描写
- D) グラントに与えられた謁見の形式と過去のそれとの比較
- E) 段取りの具体的な順番や展開
- F) 参加者の発言、演説や会話の記録
- G) 日本における天皇の特異な地位の解説
- H) 天皇を取り巻く歴史や伝統の解説
- I) グラントと天皇との交流の意義の考察
- J) 明治維新以降の日本の諸改革や「進歩」

場面の展開

- ① A → B → C → G → I → E → I → E → F
- ② G → J → I → E
- ③ I → H → G → E → A → F → D → J
- ④ I → G → H → I → J → D → J → I → J → I → E → A → E
- ⑤ I → E → B → A → E → C → F

このように、第5番の場面、すなわちグラントが明治天皇に離日の挨拶を告げるくだりを例外としながらも、「日本における天皇の特異な地位」や、「グラントと天皇との交流の

意義の考察」,そして「天皇を取り巻く歴史や伝統の解説」といった事柄は,おおよそ相前後して,関連性を持たされた形で記されていると言えよう。

4. ヤングが描く天皇像: Emperor と Mikado の間で

前章では,ヤングの旅行記のなかで天皇が登場する場面を整理し,それらにおける記述の展開を確認した。そうすると,天皇を扱う際に繰り返されるいくつかのモチーフや関連性を持たされる事柄の存在に気づいた。そこで本章では,ヤングが天皇を指す時に用いる言葉そのものを対象にして,そういった言葉が含む意味や背景,およびそれらが使われる場面と用途を検討することにした。そうすることで,第1章ですでに述べた,表象研究やとりわけオリエンタリズム批判に中心的な問題となる「暴力」という位相が浮上することになるだろう。この問題に関しては第3節で考察する。しかしこの問題に辿り着くには,ヤングのテキストのなかで一方では Emperor と,そして他方では Mikado といった二通りの言葉が場面や文脈によってある程度使い分けられていることにまず注目しなければならない。以下では第1節で前者を取り上げ,第2節では後者について考察する。

4-1. Emperor としての天皇

言うまでもないことだが,旅行記のなかで Emperor といった言葉は「皇帝」を表す用語として,そういった位ないし称号を認められていた清朝中国やロシア,オーストリアの君主などに対して用いられている。具体的に日本の君主を表象する場合において,Emperor といった表現は,皇位にある特定の君主(ほとんどの場合は明治天皇)が積極的もしくは主体的に行動する文脈で用いられることが多い。その際,Emperor が例えばグラントを皇居に招待したり,観兵式の開催を命じたり,グラントと会談したり,一行を接待するために諸々の手配をしたり,さらには自ら皇室の古い伝統を改めて近代化を率いたりする,といった具合である。以下では Emperor が用いられるいくつかの箇所を取り上げて,この表現を通して行われる天皇表象を検討する。

The Emperor of Japan is fond of his army, and was more anxious to show it to General Grant than any other institution in the Empire. Great preparations had been made to have it in readiness, and all Tokio was out to see the pageant. The review of the army by the Emperor in itself is an event that causes a sensation. (...) At the close of the review (...) The Emperor received the General and party in a large, plainly furnished room, and led the way to another room where the table

was set. The decorations of the table were sumptuous and royal. General Grant sat on one side of the Emperor, whose place was in the center. The Emperor conversed a great deal with General Grant through Mr. Yoshida, and also Governor Hennessy. His Majesty expressed a desire to have a private and friendly conference with the General, which it was arranged should take place after the General's return from Nikko [Young 1879, Vol.2 : 533-34] .

上記は第2番の場面、即ち1879年7月7日、日比谷練兵所で行われた陸軍飾隊式のくぐりからの引用である。その際、明治天皇、グラント、参議・山縣有朋やと接待掛・吉田清成が同じ馬車に乗って閲兵し、式の後芝離宮に移動して多くの外国公使、皇族や重臣・官僚とともに食卓を囲んだ。このような出来事を綴るヤングの記述のなかで天皇は近代国家の元首にふさわしく能動的に行動し、グラント一行に軍事改革の成果をアピールする活発な人物として描かれていることが分かる。つまり、明治政府による文明国の自己演出として、しかも軍隊と密接な関係のなかでEmperorが登場させられているのである。このように表象された天皇は、文明という価値を互いに共有していることを確認する観兵式の場から、来賓が代表するアメリカ合衆国との友好関係の進展を図る国家政策を主体的に担う、威厳ある君主として現れることになる。なお、陸軍飾隊式そのものへのヤングの感想などについては後述するとして、以下ではEmperorが登場するもう一つの場面を確認しよう。

In the case of the Emperor and the high officers of the state, there have no doubt been political reasons why the good feeling of Japan toward America should be shown to a representative American. But in many of its phases the intercourse of the Mikado with the General has been an event in the history of Japan [Young 1879, Vol.2 : 566] .

上記は第4番の場面、つまり8月25日に開催された上野公園祝典のくぐりへの導入部分からの引用である。そこで、アメリカ合衆国前大統領グラントが日本を訪問したことや政府からの厚遇の意義を評価している。ヤングの指摘をあえてまっまでもなく、グラント一行の接待には当然政治的な意図が存在したわけだが、ここでは国賓接待という政治行為の主体として、政府高官と並んでEmperorが名指しされていることに注目したい。グラントは大英帝国の統治なしではインドが停滞もしくは後退し、混乱に陥る他ないとして、

さらに中国に関してはその保守性を批判した。そしてヤングはヨーロッパ勢力の浸透にも関わらず太古以来の伝統がインドや中国において衰えることなく脈々と流れていると見ていた²⁾。それに対して、Emperor 及びそれに凝縮される日本の表象は、アジアに文明が浸透していくことへの表象主体の期待を象徴するといった側面をも帯びることになる。このような意味で、旅行記で好意的に描かれた同時期のタイ国王ラーマ5世の表象と日本の天皇に対するイメージが類似していると指摘できる。

上記のように、日本での体験を記述するなかでその君主を Emperor と呼ぶことの背景や意味を論じた。ただし、上記の引用箇所を確認できるように、Emperor の他に Mikado という表現が同時に用いられていることに注目したい。次節で見るようにこれは単なる言い換えや重複回避ではない。というのは、天皇による主体的・能動的な政治行為との関連で Emperor が用いられたのに対して、グラントと天皇との交流は歴史上どのような意義を持つかを説き起こす時に、Mikado というキーワードが引き合いに出されるためである。

4-2. Mikado が意味するもの

旅行記において日本の君主を指す言葉としての Emperor に関して前節で考察したのに続いて、本節では同じく Mikado という表現の背景や意味について検討したい。

旅行記において、日本の歴史や伝統のなかで天皇が従来帯びてきた特異な地位や権威を記述する際、または天皇とグラントとの交流が持った歴史的意義を強調する時には、主として Mikado という言葉が好んで用いられることに気付く。そもそも、17世紀末にケンペルが『日本誌』を著して以来、Mikado という言葉は「生まれながらの教皇」として複雑な禁忌や儀礼に囲まれながら、神秘と沈黙の御簾に隠された、「世俗上の皇帝」である将軍に対する、日本における「精神上の皇帝」を指すものとしてヨーロッパで流布した。

さらに、Mikado に込められた神聖性・儀礼性・幽閉などのイメージもまた、ヨーロッパから隔離された日本の縮図として、以降機能するようになった節がある。このように、こういった言葉は静止的であり濃厚な神秘性に囲まれ、かつ審美的に優雅でありながらも、他方で何処か奇怪で不可解な、見知らぬ「日本」を代表するモチーフとして確立した。ヤングが旅行記を執筆した1870年代末という時期の前後にもこの表現はなお用いられ続けていたことが確認できる。例えば、1870(明治3)年、世界旅行の途次で日本を訪れたアメリカ人シュワード(William H. Seward)が著した *Travels Around the World* (1873年刊行)や、同国出身でキリスト教の伝道に努めお雇い外国人として教育に携わったグリフィス(William Elliot Griffis)の *The Mikado's Empire* (1876年刊行)などが挙げられよう。そして Mikado という言葉に込められる神秘性や異質性が最も露骨に、そして絶妙に生か

されたものとして、1885年にロンドンで初演されたオペラ *The Mikado* (Arthur Sullivan 作曲, W.S. Gilbert 脚本) は実に雄弁な事例と言わなければならない。その際、ヨーロッパとは遥か隔絶された極東の国に物語の舞台を設定することで、脚本家は異質な土地の奇怪な慣習や制度に扮して、当時の英国の政治や社会制度に対する風刺を行なったことが有名である。

さて、以下のテキスト分析で明らかにするように、ヤング自身もケンペル以来の Mikado 像を踏襲している。そしてそれと同時に、いわゆる「精神上の皇帝」が世俗上の権力を統合して近代化政策を率いていく過程との関連で天皇を捉えているのである。

You cannot imagine, without ascending into the regions of mythology, and recalling what the poets have dreamed of the gods of Mount Olympus, the position in which the Mikado is held in Japan. The office is the highest known development of the royal quality. Other sovereigns reign because of the divine right, the grace of God. The Mikado reigns because he is divine—not alone because his office is sacred, but that he is sacred himself, destined when he passes away to become one of the immortal gods [Young 1879, Vol.2 : 566] .

上記の引用は第4番の場面に属している。グラント訪日の頂点と評価された上野公園祝典について書く前に、ヤングがそれまでに数回にわたって未曾有の厚遇を施した主体、即ち日本政府の元首であるところの天皇に（彼の見地で）まつわる重厚な伝統や歴史的地位をここで振り返っているのである。そうすると、ヤングの筆は強い神秘性や憧憬、そして濃厚な幻想性の霧に包まれた異質的な他者、Mikadoを生み出すことになる。彼によれば、生きては現人神として崇められ、死んで神となるその姿は現在にギリシア神話そのものを彷彿とさせるといふ。このような性格を持つ Mikado の特異な地位とは、王権神授説に基づく欧州諸王国の君主とも異なり、君主自身が神聖であることに基づくとされている。国王を立てず、神のものと平等で元首を自由に、合理的に選んでいと自負するアメリカ人にとって、このように描かれた天皇が幾重にも異質な存在として映ったのではないだろうか。

4-3. Mikado 表象をめぐって・自他の表象における暴力の所在

前節では、日本の君主を Mikado として表象する際の基本的な背景や意味を概観した。そこで本節では、表象研究やオリエンタリズム批判において核となる暴力の問題に注目し

たい。そのため、まず以下では Mikado を表象する際に暴力という位相がどのように扱われているかを分析する。

In all the changes that have befallen Japan the reverence that surrounds the throne has never abated. When the tycoons reigned, holding the sword and the purse—absolute masters of Japan—a word from the secluded monarch of Kiyoto, who had never seen the sunshine beyond the walls of his castle, was sufficient to undo them (…)

(…) Even the people, conservative as the Oriental mind naturally is, and proud of the traditions of an ancient civilization, changed in a day, and never questioned the change, because it was the will of the Emperor [Young 1879, Vol.2 : 566-67] .

これも第4番の場面に先立つ導入部分で記されているものである。明らかのようにここで描かれている天皇とは、前節においてすでに確認した静止的で神秘的な、外部（もしくは表象主体である欧米）から隔絶された、いわば古き日本のイメージの縮図とでもいうべき Mikado 像をもろに受け継いでいるものである。その文脈の延長線上に、神聖な天皇を中心に仰いだ精神的な共同体としてヤングが日本社会を描いていく。現に、幕末から明治維新にかけて急激な政変と社会的変革が巻き起こり、混乱があったにもかかわらず天皇への尊崇は揺るぎなかったとされる。そうであればこそ、たった一言を発することで数世紀の間に権力を誇った幕府が瓦解し、保守的とされる東洋の民衆が近代化政策を受け入れたという近年における日本の動向が説明される。そこには日本社会における秩序と平和を維持する精神的な支柱として天皇が設定されていた。

このように見れば、Mikado の絶対的な権威とは暴力が伴わないものとして捉えられていると言わなければならない。つまり、こういった天皇像を展開する際に暴力という位相が抑圧もしくは抹消されて、その所在と行方が曖昧にされたままなのである。しかし本章の第1節ですでに確認したように、天皇が近代的な軍事組織を率いる主体としても描かれていることをここで思い出さないわけにはいかない。そのため、以下では第2番の場面に再び目を向けて、近代的な軍事力を誇示する天皇が表象される際に、どのような事柄が同時に置かれ、暴力の所在はどこへ向かうかを検討する必要がある。

The glorious march of our civilization has been through battle smoke, and when Japan threw off the repose and dream-life of centuries and came into the wakeful,

vigilant, active world, she saw that she must arm, just as China begins to see that she must arm. The military side of Japanese civilization does not interest me, and I went to the review with a feeling that I was to see an incongruous thing, something that did not belong to Japan, that was out of place amid so much beauty and art. The Japanese themselves think so, but Europe is here with a mailed hand, and Japan must mail her own or be crushed in the grasp [Young 1879, Vol.2 : 533] .

上記では陸軍飾隊式に立ち会ったヤングが軍事的な側面を強調しながら日本の文明化について述べている。そうするなかで、彼が静寂、悠久の不変や夢想などのイメージ群のもとで本質化された、西洋文明到来以前の優雅で審美的な日本を抽出して、それに対して活動的で油断のない、攻撃的なヨーロッパを対置していることが窺える。そこで、西洋文明の到来とともに数世紀にわたって静まり返った東洋の地に新たな暴力の形態がもたらされたとされている。それは帝国主義的なヨーロッパ勢力から自己を守るために余儀なく取り入れなければならなかった近代的軍事力である。

しかし飾隊式でそれを見せつけられているヤングが違和感を覚える。彼は静寂や不変性、文芸や夢想というイメージのもとで制度化・文脈化された日本表象に立脚して、近代的な軍隊組織はこういった日本の本質とは相容れないものであると断言した。そしてそうすることで、日本の表象から暴力をいわば異物として排除することを試みている。のみならず、本質化された日本を表象するヤング自身もまた、西洋文明がもたらした新たな暴力の形態とはあえて距離を置き、暴力については語らないという選択を取っている。そしてこの点において、もう一つの他者としてヨーロッパが登場させられていることに注目したい。なぜなら、他者としてのヨーロッパに古き日本の固有性を破壊する主体、言い換えれば暴力の主体性が転嫁されているからである。こういった他者表象が展開されたことを明かにすれば、ひとり日米関係に限らず日本の西洋に対する門戸開放のきっかけとされたペリー提督の軍事的脅迫に等しい砲艦外交が一切言及されていないのも不思議ではなくなる。

5. 天皇とグラントの特異な関係：日本体験の特権化と自己規定

前章ではヤングが描いた天皇像の多様な位相に着目し、天皇表象における暴力の所在をめぐるいくつかの問題を確認した。その時のヤングは、静止性、神秘や幽閉のイメージをめぐって制度化された従来 of Mikado 像を参照しながら、天皇（そして日本そのもの）の表象から暴力の要素を異物として排除していることを確認できた。ただし、そればかりで

はない。同時に、近代国家の元首であるが故に常に暴力性を帯びているはずの Emperor が表象される場合でも、ヨーロッパが新たに他者化されて、日本との関係性において暴力の主体へと転嫁されるのであった。ただし、この点にいたっても、表象する主体の位相は依然として曖昧なままである。したがって本章では、ヤングが天皇とグラントの関係性のあり方をどのように記述したかを検討して、それを通して旅行記においてどのような自己規定の作業が試みられたかを明かにしたい。

The Mikado has never failed in courtesy to the princes of other royal families who have visited him. But while he treated English, Russian, and German princes as princes, he has treated General Grant as a friend.(…) The conversation of which I have given a narrative may have seemed an ordinary and perhaps an indifferent affair. But when you consider it was the Mikado, and that never before had he allowed any such intercourse with an alien, you will see the importance of the incident in the history of Japan. While the Mikado has departed from the traditions of centuries to do honor to his guest, the people have on their part shown a strange interest in General Grant [Young 1879, Vol.2 : 567] .

上記は再び第4番の場面からの引用である。ここでヤングは天皇がヨーロッパの諸王室と行ってきた交流と、今回のグラント訪日に際立った懇切な態度とを比較して、前大統領のこういった訪問が日米関係というより、むしろ日本の歴史そのものなかで帯びている意義を主張している。ここでは、グラントと交流するなかで古来の伝統や禁忌から離れて、その特異な異質性を自らの意思で解消していく Mikado の姿が描かれている。そこでは前章で見た植民地主義的なヨーロッパによる軍事的脅威に相当するような要素はなく、天皇のこういった対応は自主的なグラントへの特別な友好の証とされている。そうすることによって、日本・アメリカ、もしくは日本・西洋という図式のなかで、ヨーロッパがもう一つの他者として設定されることになる。そしてそういった他者との差異化を機に、表象する主体と対象の間にも当然介在しているはずの不均衡や暴力性が他者に転嫁されて、それとは対照的に違いアジアの君主と民を文明化ないし教化する自己が規定されていく。上記の引用箇所続きには以下のような文章が記されている。

One of the features of the revolution has been the awakening of the people, and this awakening has received a strange impulse from the presence of General

Grant. (….)The people have taken a novel interest in General Grant. In some respects this is the feature of our visit most worthy of consideration. The future of Japan of course depends much more upon the freedom, the education, and the independence of the people than upon any other agency. And while the courtesy of princes and gentlemen is worthy of note, and has been marked with princely grace, the part taken by the people is memorable [Young 1879, Vol.2 : 569] .

上記のように、グラントが日本人民の間に民主的精神を成長させる原動力と位置づけられることで、天皇・グラント、または日米関係そのものを特権化する物語が完成するといつてよい。植民地主義的なヨーロッパ諸国が軍事を以て極東の国が保持する差異の抹殺に取り掛かるのとは反対に、ほとんど親善使節に等しいアメリカ前大統領の訪問は暴力を介さない文明化のあり方の可能性を読者に伝えようとしている。

池沢栄一や福地源一郎が東京府民代表の接待委員を立ち上げたことはすでに第2章で述べた通りである。東京府民代表接待委員は既述の上野公園祝典の前に新富座で観劇会(7月16日)を主催していたし、同様の動きは多かれ少なかれグラント一向が訪れた各地に見ることができた。現に、長崎の裕福な市民が済福寺で饗応の宴を挙げたし、横浜市民代表が7月9日に夜会を開催して、さらに日光では一行が宿泊を取った満願寺の境内へ住民が神輿を担ぎ込み芝居や踊りを演じるなどしたのである。この簡単な列挙からも分かるように、グラントをそれぞれの地域で迎えた主体は多様であったし、したがって各地での国賓接待の動きを全て外務省や宮内省の政策に呼応した、あるいは内面化したものと一緒くたには出来ないだろう³⁾。とはいえ、行く先々で行政官や著名の紳士から一般の住民にいたるまでに歓迎された側のヤングは、封建社会において客体でしかなかった日本人民が民主精神に覚醒して国賓接待に一役割を果たすことで公の領域へ主体的に参加しようとしている、まさに歴史的転換点と記すことになった。そこでは、文明の西漸を担う自己像を描く「明白な運命」といったイデオロギーとの類似性を持った、あるいはそれに接続可能な主張を見出すのは難しくない。

“Nothing” , said the General” , has been of more interest to me than the study of the growth of European and foreign influence in Asia.(….)since I left India I have seen things that made my blood boil, in the way the European powers attempt to degrade the Asiatic nations. I would not believe such a policy possible. It seems to have no other aim than the extinction of the independence of the Asiatic nations.

(...)I think I know the American people well enough to say that they have, without distinction of party, the warmest wishes for the independence of Japan. We have great interests in the Pacific, but we have none that are inconsistent with the independence of these nations” [Young 1879, Vol.2 : 543] .

第3番の場面、8月10日に浜離宮で行われた会談の折にグラントがアメリカの友好をアピールしている記録である。グラントが明治天皇に発し、そしてヤングがアメリカの広汎な読者に向けたメッセージのなかで、自由と平等に基づくいわば「理念の共和国」といった自己像を宣伝しつつ、「旧世界」たるヨーロッパの帝国主義や圧政との差異化を図り自己を規定する意図が不可分に取り組みされていた。こういった主張は「モンロー主義」のアジア版として理解できなくもないだろう。ただし、モンロー主義はアメリカ大陸内での覇権を同時に意味していたし、さらには1803年のルイジアナ買収や、1846年の米墨戦争に伴った領土拡大、そしてハワイや太平洋への進出基盤が築かれつつあったという歴史的背景を見過ごすわけにはいかない。

結びに代えて

以上、本稿で追ってきたように、近代化途上の日本を訪れたヤングは古き日本とそのMikadoを語る上での既存の表象枠組みを参照しながら、Emperorの姿に代表される急速な変化を記述した。当時の欧米からの一般来訪者の観点に立てば、「西洋文明」を導入しつつあった日本とは、表象する主体との差異を徐々に解除すると同時に、先行する表象枠組みから次第に乖離していく側面を見せていたと考えられる。したがって、ヤングの旅行記はこのような他者に対して既に制度化された表象のリアリティを更新させる一翼を担ったと言える。なぜなら、彼は既存の表象枠組みをそのまま複製するのに留まったわけではないからである。

先行するMikadoの表象を同時代的なコンテキストのなかで再解釈し、神聖なMikadoの権威のもとで推進される「文明化」・近代化のあり方を描いて見せた点にこそ、ヤングが著した日本旅行記の独自性が宿っていると言ってよい。それは明治政府が近代的外交儀礼を執り行う軍服姿の天皇を通して、文明国家の演出という自己表象を対外的に主張しようとした政策とはある程度共鳴していたように考えられる。一方、ヤングが既存の表象枠組みから明治政府の主張を汲み取るとともに、対内的自己表象としての神聖不可侵の天皇を軸にした国家秩序の構想をさらに読み取り、もしくは先取りさえした点にむしろ注目しなくてはならないだろう。というのは、日本を神秘的で優雅な、西洋から隔絶された平和

な文芸の国として、さらに孤立した国のなかでもなお九重の内に深く幽閉された神聖なる君主といった既存の表象制度を同時代的なコンテキストで再解釈するのにあたって、ヤングは新日本の表象から暴力性を戦略的に排除しているのである。そのため、ヤングの日本記述において、表象対象の内部に存在する対立、強制や支配といった要素は、神聖な Mikado を中心に広がる崇拜の共同体といった物語を展開することで、尊崇や敬慕に読み替えられて、抹消もしくは曖昧化されていると言える。

そして上記のように脱政治化され無菌化された対象を操作することで、さらには帝国主義的なヨーロッパとの差異化を通して、ヤングは暴力が介在しない他者との関係性、いわば他者への感化を起点にした理想的な自己像をアメリカの広汎な読者と共有することができた。それと同時に、Mikado がその神聖性を自ら冒す姿をさらに盛り込むことで、軍事的脅迫のもとで実現した「不平等条約」に代表される、法的に制度化された、他者に対する不均衡や従属化を内包する暴力的な関係性のあり方、およびその主体性の所在が曇らされるのであった。その結果、ヤングが自他関係を再解釈して、かつ新たにコンテキスト化するための起点を置いたと言える。そこでは、他者との良好な関係を保つには、自己の振りかざす価値を基準にして他者が自らを変革しなければならないという姿勢がすでに宣伝されていた。この点において、制度化された表象枠組みに亀裂を入れると同時に、新たな他者表象の萌芽を自己規定との関係で展開する契機を見出すことが可能であろう。

後年、近代天皇制が完成し、軍国主義的色彩が強まり、そして対外侵略や英米との対立が深まっていくのに連れて、Mikado という語が後退していくものの、日本を神聖な Emperor を中心とした崇拜の共同体とする表象は却って勢いを盛り返す。しかしその時は Emperor が暴力の主体として再定義されていく。そして敗戦後、日米合策によって天皇表象から神聖性ととも、暴力性もまた再び剥奪されてしまった。このように欧米人観察者による天皇表象の展開を要約することは粗雑ではあるが、その流れのなかでヤングの表象との連続性や断絶が錯綜している様子は見て取れるように思う。表象テキストは具体的な権力関係の結晶であると同時に、そういった関係の再解釈や再文脈化へのプロセスと切り離せないものとなる。テキスト内在的な分析を通して、その起点を捉えなおすための回路を開くことができるだろう。

注

- 1) グラント一行による日本訪問や、そのなかでのヤングの旅行記の位置づけに関しては、拙稿「明治前期の他者認識を巡って—U.S. グラント一行訪問に錯綜する眼差しから—」(『日本学報』第33号、近刊)を参照していただきたい。

- 2) 前掲拙稿を参照のこと。
- 3) 前掲拙稿を参照のこと。

参考文献一覧

英語文献

- Fellman, Michael, *Around the World with General Grant*, Baltimore, John Hopkins University Press, 2002.
- Grant, Ulysses Simpson, *General Grant's Letters to a Friend 1861-1880*, New York, Boston, T.Y. Crowell & Co, 1897.
- Griffis, William Elliot, *The Mikado's Empire*, New York, Harper & Brothers, 1883.
- Headley, Phineas Camp, *The Life and Campaigns of General U.S. Grant*, New York, G.A.,Leavitt, 1869.
- Hunt, Michael H., *Ideology and U.S. Foreign Policy*, New Haven and London, Yale University Press, 1987.
- Kaempfer, Engelbert ; translation and notes by Beatrice M. Bodart-Bailey, *Kaempfer's Japan : Tokugawa culture observed*, Honolulu, University of Hawai'i Press, 1999.
- Keene, Donald, *Emperor of Japan : Meiji and his World, 1852-1912*, New York, Columbia University Press, 2009.
- Said, Edward, *Orientalism*, London, Penguin Classics, 2003
- *Culture and Imperialism*, London, Chatto & Windus, 1993
- *Representing the Colonized: Anthropology's Interlocutors*, *Critical Inquiry* 15 (2), 1989
- Seward, William H., *Travels Around the World*, New York, D. Appleton and Company, 1873
- Simon, John Y.,ed., *The Papers of Ulysses S. Grant*, Volume 29, Carbondale, Southern Illinois University Press, 2008
- Waugh, Joan, *U.S. Grant, American Hero, American Myth*, The University of North Carolina Press, Chapel Hill, 2009
- Yokoyama, Toshio, *Japan in the Victorian Mind : A study of Stereotyped Images of a Nation 1850-80*, Basingstoke, Macmillan
- Young, John Russell, *Around the World With General Grant*, New York : Subscription Book Department, American News Co, 1879

日本語文献

- 有賀夏紀, 油井大三郎 編『アメリカの歴史』有斐閣, 2003年
五百旗頭真 編『日米関係史』有斐閣, 2009年
太田好信『トランスポジションの思想』世界思想社, 2010年
クリフォード, ジェームズ 著, 太田好信 ほか役『文化の窮状—20世紀の民族誌, 文学, 芸術』人文書院, 2003年
フジタニ, タカシ著, 米山リサ訳『天皇のページェント』日本放送出版協会, 1994年
スピヴァク, G.C. 著, 村上忠男・本橋哲也 訳『ポストコロニアル理性批判消え去りゆく現在の歴史のために』月曜社, 2003年
ジョセフ・M・ヘニング 著, 空井護 訳『アメリカ文化の日本体験』みすず書房, 2005年
多木浩二『天皇の肖像』岩波書店, 2002年
中山和芳『ミカドの外交儀礼 明治天皇の時代』朝日孫分社, 2007年
安丸良夫『近代天皇像の形成』岩波書店, 2007年
——『日本の近代化と民衆思想』平凡社, 2012年
ヤング, ジョン・ラッセル 著, 宮永孝 訳『グラント將軍日本訪問記』新異国叢書 第2輯・9, 雄松堂書店, 1983年
渡辺京二『逝きし世の面影』平凡社, 2005年